

統計スポット情報

No. 175

22. 12. 3

福井県総合政策部政策統計課

— 「お酒と県民性」 お酒は楽しく、飲みすぎず —

12月に入り、忘年会などでお酒を飲む機会が増える時期になりました。

お酒は昔から人間の食生活と深く関わってきた嗜好品ですが、近年は健康面での配慮や経費節約の意識の高まりに加え、ノンアルコールビールの登場などもあって、全体に消費は減少しているようです。

今回は、何かと飲む機会が多い季節を迎えるに当たり、お酒に関わる統計を紹介したいと思います。お酒は飲みすぎに注意して、楽しく飲みましょう！



1 家計の中のお酒

平成21年の家計調査の結果より、福井市の1世帯（二人以上）あたりのお酒に対する年間支出金額を県庁所在市別ランキング（政令指定都市4市を含む51市）を見てみると、酒類の合計額では、昨年の17位から3位に上がりました。さらに、これをお酒の種類別で見ると、ビールは7位から2位、清酒は15位から4位、発泡酒は19位から4位になりました。

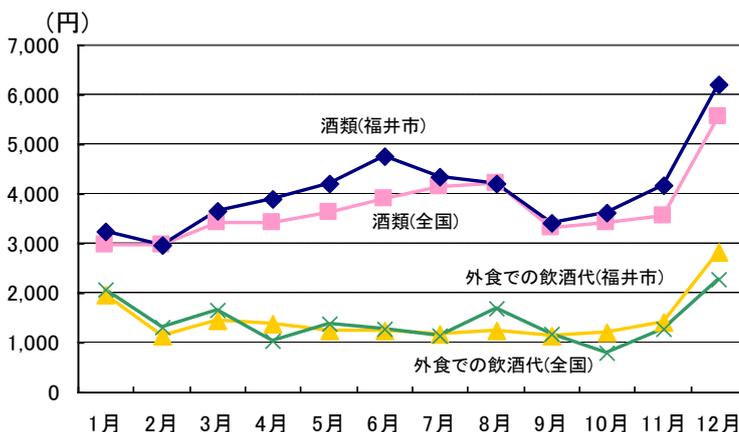
これは、酒類にかかる支出が、全国的には昨年より減少した一方で福井市では増加し、その結果、相対的に順位が上がったためと考えられます。ただし、外食における飲酒代は、全国ではそれほど変わっていないのに対し、福井市では大きく減少し、全国ランキングも24位から43位に下がりました。最近、「家飲み」という言葉をよく聞くようになりましたが、福井県はその傾向が特に強くなっているようです。

福井市の1世帯（二人以上）あたりの酒類への年間支出金額の推移（平成19～21年）（円）

酒類	平成21年			平成20年			平成19年		
	全国	福井市	順位	全国	福井市	順位	全国	福井市	順位
酒類	43,488	53,103	3	45,071	47,364	17	44,872	45,642	18
清酒	6,603	9,113	4	6,833	8,084	15	7,267	9,664	8
焼酎	7,436	5,857	32	7,400	5,603	37	7,162	3,841	47
ビール	14,513	20,088	2	16,652	19,098	7	17,218	17,562	12
ウイスキー	1,269	1,034	27	1,143	983	28	1,220	669	36
ぶどう酒	2,525	1,662	39	2,323	1,156	46	2,414	1,291	45
発泡酒	6,138	9,692	4	6,401	7,409	19	5,991	9,636	4
他の酒	5,004	5,657	14	4,319	5,030	15	3,600	2,978	37
飲酒代(外食)	17,025	13,479	43	17,607	18,668	24	17,586	19,290	17

資料：家計調査（総務省）

酒類・飲酒代への1世帯（二人以上）あたり月別支出金額



資料：家計調査（平成19～21年平均）



次に、月ごとのお酒に対する支出の動きを見てみましょう。酒類への支出金額、外食での飲酒代は、どちらも12月がピークで、この傾向は全国的に同じようです。

年末は、忘年会にクリスマスといったイベントが多く、また、贈答用や新年のお供え用として購入するケースも多いためと思われます。

2 お酒で見える地域性

酒類支出金額県庁所在市別ランキング

(平成19~21年平均)

(円)

	全国平均	44,477
1	新潟市	56,812
2	秋田市	55,327
3	松江市	53,702
4	盛岡市	53,586
5	青森市	52,311
6	札幌市	51,031
7	金沢市	49,909
8	富山市	49,452
9	山形市	49,140
10	福井市	48,703
...		
49	那覇市	29,933

次に、1世帯あたりの平成19~21年平均の酒類の年間支出金額のランキング上位を見ると左表のようになります。

福井市は10位ですが、上位10市を見ると、北陸から北の地域の都市がほとんどを占めています。適正量のアルコールは血行を良くし、体を温める効果があります。これらの地域は、いずれも冬の寒さが厳しい地域で、寒さを乗り越えるために昔からお酒が必要とされてきたのかもしれない。

また、東北や北陸は、米どころとして、日本古来のお酒である清酒の醸造に適した地域であったことも背景にあると思われます。



地方別1世帯あたりの酒類への年間支出金額(平成19~21年平均)

(円)

	北海道	東北	関東	北陸	東海	近畿	中国	四国	九州	沖縄	(上位3市)
清酒	6,761	9,974	6,748	12,395	6,165	6,879	7,649	5,807	4,466	843	新潟市、秋田市、松江市
焼酎	7,300	8,914	6,970	6,085	5,440	6,138	8,647	7,603	11,131	6,035	鹿児島市、宮崎市、熊本市
ビール	17,954	17,452	15,088	21,900	15,264	17,838	17,178	14,464	14,183	11,622	京都市、金沢市、札幌市
ウイスキー	2,157	1,862	1,476	1,406	775	1,045	913	743	562	189	秋田市、札幌市、仙台市
ぶどう酒	2,302	2,617	3,507	1,937	1,613	2,042	1,401	1,503	1,410	1,174	東京区部、奈良市、さいたま市
発泡酒	6,150	6,297	5,588	8,481	4,837	6,783	8,529	6,072	6,078	8,928	高知市、広島市、新潟市
他の酒	4,844	4,592	4,480	4,874	3,517	4,187	4,142	5,160	4,165	2,422	高知市、山形市、青森市
合計	47,467	51,708	43,857	57,078	37,612	44,913	48,459	41,352	41,995	31,213	

※地方別の支出金額は、県庁所在市以外の都市・町村の世帯を含めて算出されているため、県庁所在市だけの支出金額とは一致しない。

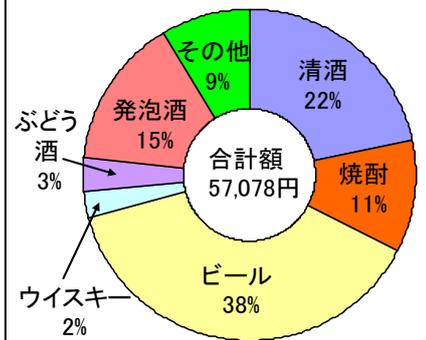
では、地方によって飲まれているお酒の種類には、違いがあるのでしょうか？

上表は、各種のお酒に対する1年間の消費金額を地方別に、下図はさらに各酒類別にグラフにしたものです。福井市を含む北陸地域は、合計金額が全国トップで、さらにその中でも清酒とビールが全国1位になっています。また右の図からビールが一番好まれているのがわかります。

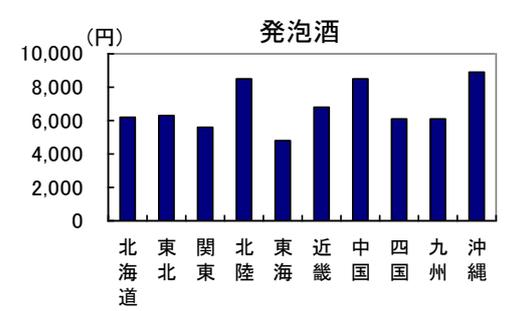
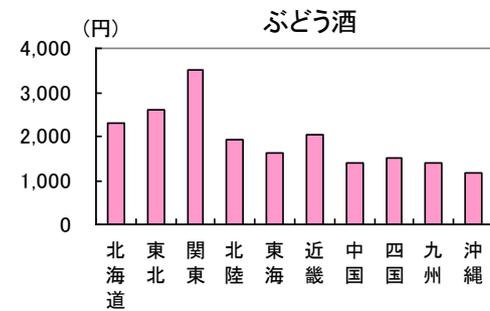
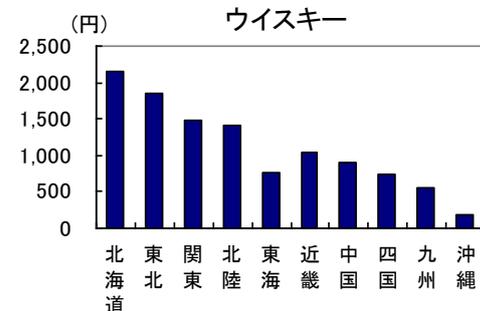
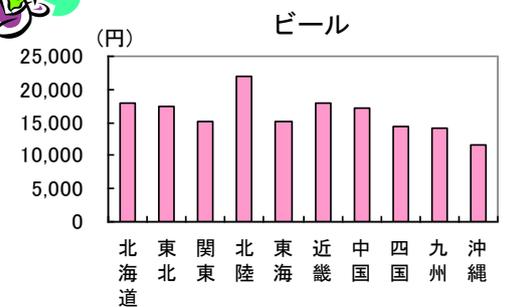
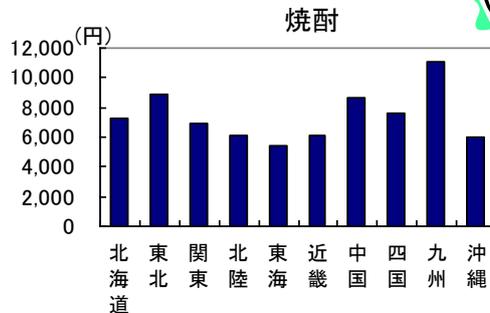
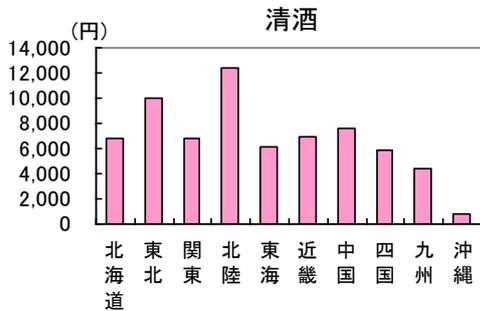
九州は予想どおり焼酎がトップで、上位3市は全て九州の都市が占めています。ウイスキーは、北海道~東北と、北の地域ほど支出が多くなっています。ぶどう酒は国内生産日本一の山梨県を含む関東で1位です。一方、発泡酒などは新しいもののせいか、全国でまんべんなく飲まれているようです。

地域により好まれるお酒に違いがあるのは、歴史や気候、製造元の立地状況など、様々な要因が考えられますが、特に北陸で清酒、九州で焼酎が好まれるのには、原料となる米や麦、さつまいもなどの生産との関係が強いと思われます。

北陸地方の酒類支出金額の種類別割合



資料：家計調査(平成19~21年平均)

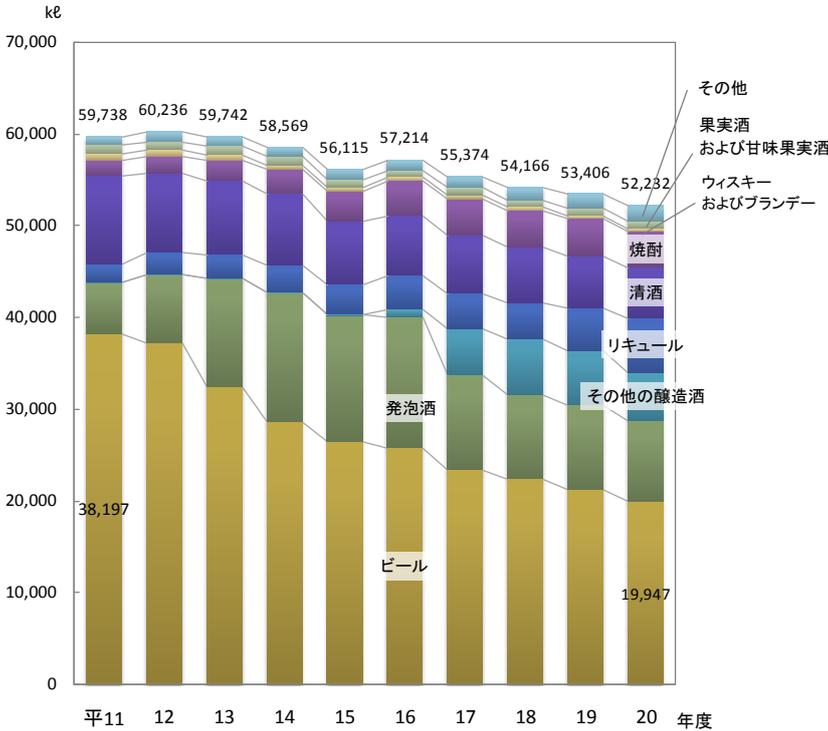


3 お酒の販売（消費）状況

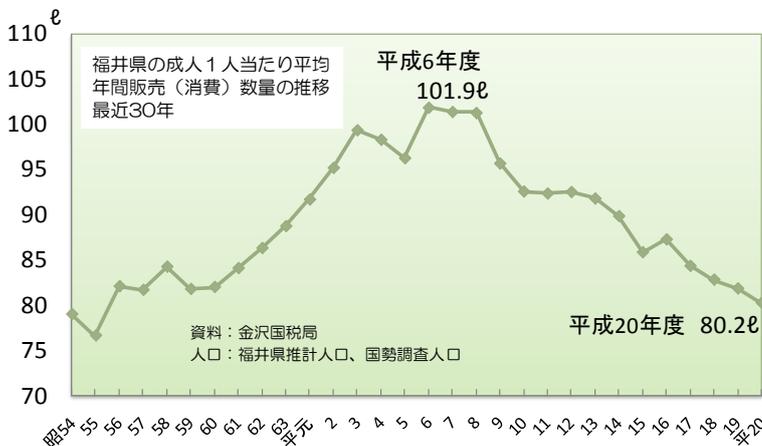
お酒の販売（消費）状況を知る統計の一つに国税庁の酒税統計があります。

次は、この統計から福井県で実際に販売（消費）されているお酒の数量の推移を見てみましょう。

酒税統計にみる福井県の酒類別販売（消費）数量の推移



（注）「その他」は、合成清酒、みりん、スピリッツの合計。
資料：金沢国税局



資料：金沢国税局
人口：福井県推計人口、国勢調査人口



左図を見ると、ここ10年で福井県内の年間酒類販売数量は10%程減少しているのが分かります。これを酒類別にみるとビールが10年前のおよそ半分近くまで減少し、発泡酒は、平成16年までは増加傾向でしたがその後減少に転じています。一方、リキュール、焼酎は、10年前の2~3倍に増加しています。また、発泡酒にとって代わるかのように平成16年から増加し、ここ4年10%程の割合を占めているのが「その他の醸造酒」で、数年前に登場した「第3のビール」等がこれに該当します。なお「第3のビール」は、その成分により「その他の醸造酒」と「リキュール」の2つに分類されます。

次に、ここ30年の成人1人当たりの平均年間酒類販売（消費）数量（年間販売数量／成人人口）の推移を見ると、ピークだった平成6年度に比べると、平成20年度は約13%減少し、30年前の昭和54年度と同水準まで落ち込んでいます。これを1日にビール1缶（350ml）を飲むものとして換算すると、この14年で、おおむね週5~6日（年間で約291日）から週4~5日（年間で約229日）のペースに減少したことになります。

これらのことから福井県民は、お酒の消費量は抑えつつも、色々なお酒を楽しむようになっていることがうかがえます。

<一口メモ1> 「六条大麦について」

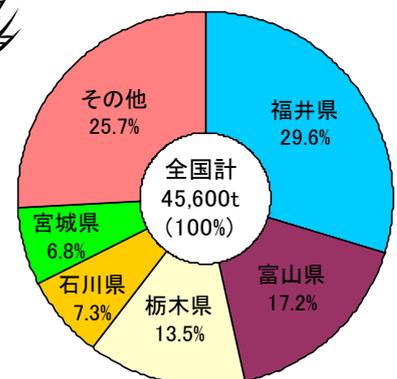


大麦には大きく二条大麦と六条大麦の二つの種類があり、ビールの主原料である麦芽には、二条大麦が主に使われます。

ところで、もう一方の六条大麦は、主に麦茶や麦ご飯、麦とろなどに使われますが、この六条大麦では、福井県がシェア30%と、国内最大の生産地となっています。

最近では、この地元の六条大麦を活かした地ビールの開発・商品化を進める動きもあり、近い将来、新たな福井のブランドとして登場することが期待されます。

平成22年産麦類の収穫量（六条大麦）

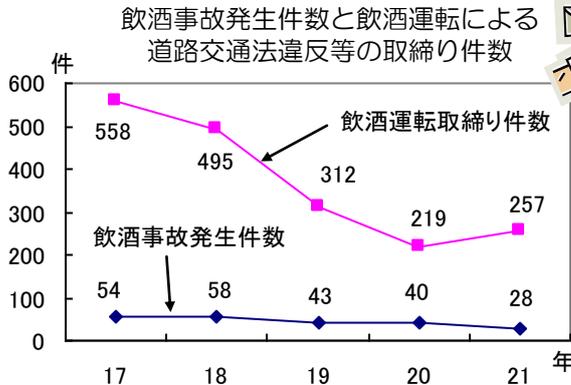


資料：平成22年9月30日農林水産省公表資料

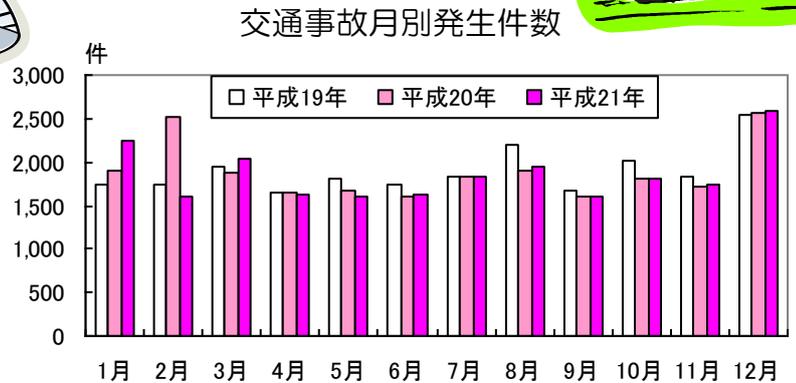
4 お酒と交通事故

最近、飲酒事故や飲酒による取締りの件数は比較的減少傾向にあるようですが、一方で天候や道路状況の影響からか、年末は交通事故の発生件数が特に多くなっています。

この時期は忘年会やクリスマス行事等で飲酒の機会も多く、交通条件の悪い夜間に外出するケースも何かと多い時期なので、特に用心が必要なようです。



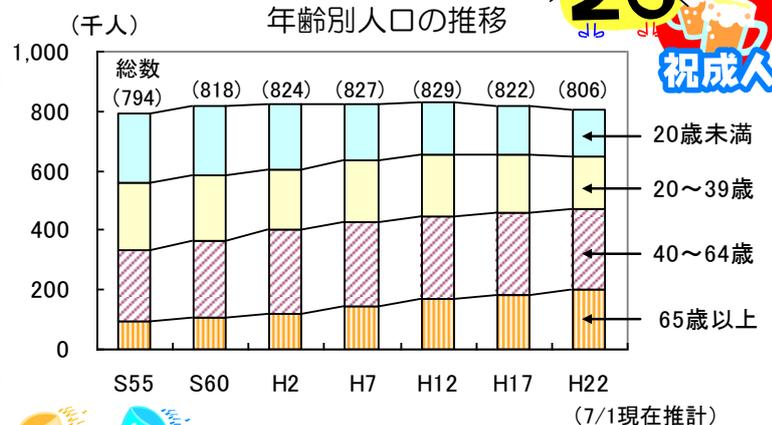
資料：福井県警察本部「福井の交通」



5 「お酒は20歳を過ぎてから」(年齢別人口の推移)

近年、福井県の人口は減少傾向にありますが、これを年齢別に見てみると、20歳未満など若い世代で減少が進み、その一方で65歳以上の高齢層では増加していることがうかがえます。

高齢者の人口が増えるのは、健康長寿の社会が着実に進んでいることのあらわれではありますが、今年実施された国勢調査では、各世代の人口が実際にどのように推移しているのか、注目されるところです。



資料：国勢調査、福井県の推計人口

<一メモ2> 「お酒の記念日」



日本では、お酒に関係する企業や団体、あるいは愛飲家等により、お酒にまつわるいろいろな記念日が制定されています。

・「ビールの日」「地ビールの日」4月23日

1516年にドイツでビールの基準を定めた「ビール純粋令」が制定されたことにちなみ、日本地ビール協会が制定。

・「日本酒の日」10月1日

酒という字の由来である「酉(とり)」が12支で10番目にあたり、また明治以来、毎年酒造りが始まる月が10月とされていたことから、日本酒造組合中央会が制定。

・「本格焼酎の日」11月1日

新酒が出来上がる日が11月1日前後であること、また11月は、10月に「出雲大社」に呼ばれていた神様が帰ってくる大変めでたい月として、九州で開催された本格焼酎の会議で制定。

その他にも、「樽酒の日」(1月11日)、「梅酒の日」(入梅の日(6月10日頃))、「イタリアワインの日」(6月2日)、「ピヤホールの日」(8月4日)、「断酒宣言の日」(11月10日)、「ゴクゴクの日」(5月9日)、「立ち飲みの日」(11月11日)、「酒風呂の日」(冬至、春分、夏至、秋分)等の記念日が制定されています。



—平成22年工業統計調査を実施します！—

製造業を営む事業所を対象に、12月31日現在で工業統計調査を実施します。調査は12月から翌年1月にかけて行いますので、調査票へのご回答をお願いいたします。